

社会技術研究開発事業 令和5年度研究開発実施報告書

科学技術の倫理的・法制度的・社会的課題（ELSI）への
包括的実践研究開発プログラム

「パンデミックの ELSI アーカイブ化による感染症に
レジリエントな社会構築」

児玉 聡
(京都大学大学院 文学研究科 教授)

目次

1. 研究開発プロジェクト名.....	3
2. 研究開発実施の具体的内容	3
2 - 1. プロジェクトの達成目標.....	3
2 - 2. 実施内容・結果	3
2 - 3. 会議等の活動.....	8
3. 研究開発成果の活用・展開に向けた状況	9
4. 研究開発実施体制	10
5. 研究開発実施者.....	10
6. 研究開発成果の発表・発信状況、アウトリーチ活動など	13
6 - 1. シンポジウム等.....	13
6 - 2. 社会に向けた情報発信状況、アウトリーチ活動など	13
6 - 3. 論文発表.....	14
(1)	14
●国内誌.....	14
●国際誌.....	14
6 - 4. 口頭発表（国際学会発表及び主要な国内学会発表）	14
(1) 招待講演.....	14
(2) 口頭発表.....	15
(3) ポスター発表	15
6 - 5. 新聞／TV報道・投稿、受賞等.....	15
(1) 新聞報道・投稿.....	15
(2) 受賞	15
(3) その他	15
6 - 6. 知財出願（出願件数のみ公開）	16
(1) 国内出願（ 0 件）	16
(2) 海外出願（ 0 件）	16

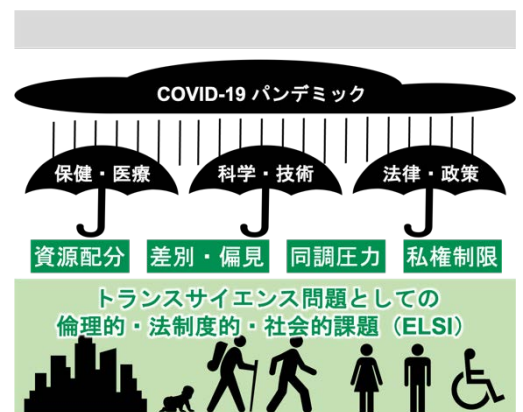
1. 研究開発プロジェクト名

「パンデミックのELSIアーカイブ化による感染症にレジリエントな社会構築」

2. 研究開発実施の具体的内容

2 - 1. プロジェクトの達成目標

今般のCOVID-19のパンデミック(世界的大流行)は、日本を含めた世界中の国々で公衆衛生的危機(public health emergency)をもたらした。感染症のパンデミックは、感染拡大による重症者や死亡者を生み出すだけでなく、パンデミックを阻止または収束させようとする保健・医療、科学・技術、および法・政策の対応が、医療資源配分の問題や差別・偏見の問題、また人権やプライバシーの制限の問題など、さまざまな倫理的・法制度的・社会的課題(以下、ELSI)をもたらす可能性がある。すなわち、パンデミック収束に向けた取り組みは、社会科学も含めた広義のサイエンスの問題であるが、その取り組みによって生じるELSIは、優れてトランスサイエンスの問題だと言える(右図)。今後発生しうる感染症にレジリエントな社会を構築するには、これらのELSIを予め想定して取り組むことが不可欠である。

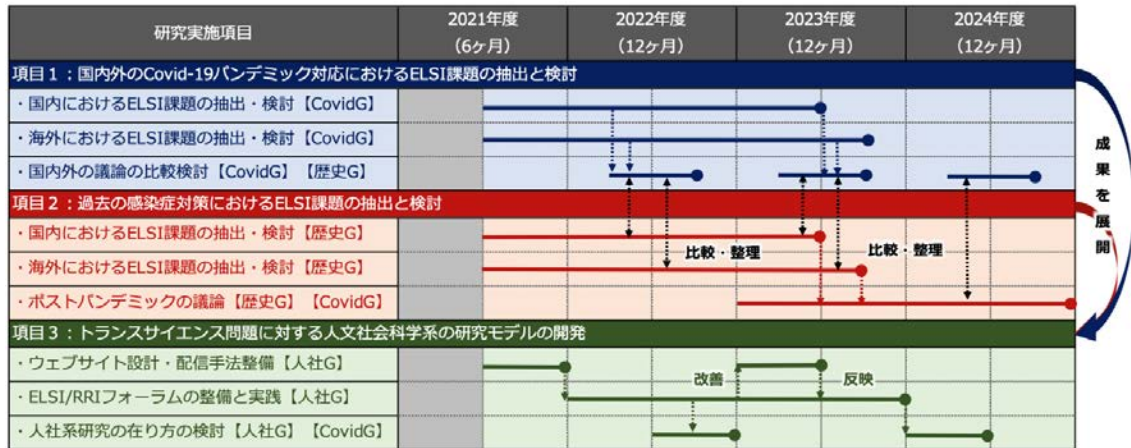


このようなELSIについて一例を挙げると、感染症対策の一つにワクチンがあるが、その開発から実際の接種までの間には、臨床研究における研究倫理の問題(誰が研究参加者になるか、早期承認は認められるか、ヒューマンチャレンジ研究は正当化できるか等)、各国及び国内でどのように分配するか、また市民の間でのワクチン接種の優先順位やワクチンの特許問題をどうするか、といった多くのELSIが生じうる。これらの課題について、日本および世界の主だった国々がどのように取り組んだのかをアーカイブしておくことは、次のパンデミック発生時に必ず役立つと考えられる。

そこで、本プロジェクトの目標は、現今のパンデミックを収束させるために日本及び他国で行われてきた保健・医療、科学・技術、及び法・政策上の対応が生み出したELSI並びに課題解決への取り組みを整理しアーカイブすることを通じて、感染症対策に伴って生じる諸問題とその解決策について一覽性の高い基礎資料を作成することにより、将来のパンデミック発生時により倫理的な政策立案を可能とすることである。そして、この試みを通じて、トランスサイエンス問題に対する人文社会科学系研究モデルの開発を行い、あるべきELSI研究の姿や社会実装の方法論を構築する。

2 - 2. 実施内容・結果

(1) スケジュール



（2）各実施内容

■項目1：国内外のCOVID-19パンデミック対応におけるELSIの抽出と検討

2023年度は、昨年度から継続して関連する各種資料を紹介しながら、昨年度作成したタイムラインの更新やその活用などを行い、昨年度の研究をより発展させた。また、国外のアクターとの交流も積極的に行い、「ELSI」という概念そのものの捉えなおしや若手研究者の育成などにも積極的に取り組んだ。

実施体制：COVID グループ

■項目2：過去の感染症対策におけるELSIの抽出と検討

2023年度は、2020年7月に設立されたランセットCOVID委員会が公開した報告書の紹介・検討を行った。これによって、COVID対策の各国比較を行うための土台ができたと言える。さらに、視点を感染症対策の歴史に移し、明治期のコレラ対策の特徴などを調査し、報告書としてまとめ公開した。

■項目3：トランスサイエンス問題に対する人文社会科学系の研究モデルの開発

2023年度は、ELSI/RRIフォーラムを3回開催した（標葉隆馬氏、三成寿作氏、田中幹人氏）。また、2022年度までに実施したフォーラムの記録を、読売新聞の増田弘治氏の助力も得ながら一般にわかりやすい形で一つの冊子の形で再編集し、web上で公開した。フォーラムでの対話を通じて、ELSIへの取り組みの多様なあり方や、国内におけるELSI関連の研究や実践における課題、そしてそれに対してとりうる改善策が一定程度把握された。これらは、ELSIとは何を研究対象としてきたのか、そして、ELSI研究のこれからあるべき姿を理解するために極めて有益である。

（3）成果

■項目1：国内外のCOVID-19パンデミック対応におけるELSIの抽出と検討

<資料紹介>

- ・「中国の「乙類乙管」通知: 2023年初の「コロナ」対策の転換と留意点」

URL: <http://hdl.handle.net/2433/285034>

概要：これは、中国（中華人民共和国）のコロナへの対応の変化を示す資料である。日本

の報道媒体では、中国における都市封鎖や検査、個人の追跡の展開について紹介されることが多かった。対照的に、現在、コロナに関する中国の話題となると、入国時の手続きに関する話題や国内外への移動の活発化がよく取り上げられる。一方、こうした中国の政策の転換、そして、転換以降の対応のあり方に関する当局の説明について、情報量は少ない。この点から、2022 年末に公布(2023 年 1 月に発効)された「乙類乙管通知」について仮訳を示すと共に、その要点について紹介した。

・「中華人民共和国における感染症関連制度その1：伝染病予防治療法の展開（コロナ禍に至るまで）」

URL: <https://x.gd/19hnC>"<https://x.gd/19hnC>

概要：シリーズの1回目では、中国の感染症対策の基本的な法律「伝染病予防治療法」の成立とそこに至る経過、およびコロナ禍直前の状況に焦点を当て、以下のことを明らかにした。

- 感染症対策において中心的な役割を果たす法律が伝染病予防治療法（1989 年）であり、80 年代までの検討の集大成と言えるということ。
- 「緊急事態」に対応した検討が強化されたのは 2000 年代以降であり、各種の新興感染症への対応に迫られたためであるということ。
- 今日の中国の新型コロナウイルス感染症への対応を理解する上で、こうした 2000 年代以降の議論の展開を理解することが重要であるということ。

・「陰謀論の分析とその対応に関する調査報告」（本編及び要約版）

URL: (本編) <https://x.gd/AR6id>

(要約版) <https://x.gd/I0ce4>"<https://x.gd/I0ce4>

概要：この記事は、インフォデミックとよばれる情報氾濫の時代において、しばしば曖昧に用いられている「陰謀論」という言葉を改めて整理して捉えることで冷静な議論のきっかけを作ることを目的に執筆された。陰謀論の概念分析やその研究をめぐる歴史などにも目を配りつつ、陰謀論という概念は多様な性質が重なり合ったものであるということ、人々が陰謀論を内面化するのには「単純なもの見方」が関係していること、陰謀論の拡散に対して単純な解決策で対応することは難しいこと、などを指摘した。

・「Covid-19パンデミック下における遺体の取り扱い」

URL: <https://x.gd/BvlAe>"<https://x.gd/BvlAe>

概要：本記事ではパンデミック下での遺体の扱いという視点から厚生労働省・経済産業省作成の「新型コロナウイルス感染症により亡くなられた方及びその疑いがある方の処置、搬送、葬儀、火葬等に関するガイドライン」の紹介を行った。第1章では「ガイドライン」の具体的な内容と改正を紹介し、第2章では「ガイドライン」の運用について考察の素材となる資料を提示した。

<ワークショップ・シンポジウム>

- 2023年6月8日：SPT2023 23rd Biennial Conference in Tokyo 参加
- 2023年12月17日：京都大学大学院文学研究科シンポジウム「生命倫理の現状と展望」
- 2024年3月2日：京都大学大学院文学研究科 ELSI哲学フォーラム

得られた知見：これらのワークショップ・シンポジウムでは、ELSIという領域で研究されてきた取り組みと既存の生命倫理学との比較検討や、若手研究者を主体する研究発表が行われ、ELSI研究の広がり、その将来性が確認された。

<各国のCOVID-19対策タイムライン>

・「ドイツのCOVID-19対策タイムライン」

概要：ドイツでは、感染者および死者数が比較的になかったと言われている(ただし、人口比で見てもドイツの数字は日本の数字を上回っている)。それは第一に、ドイツはコロナ・パンデミックが発生した初期から対応し、感染予防法の改正などを通じて、各州がロックダウンなどの比較的強い対策を行ってきたためであろう。第二に、ドイツの医療体制は元々充実していたからと考えられる。人口一人あたりの医師数は、ドイツでは日本の1.7倍、集中治療室専門医は7倍いたとされている。「医療のひっ迫」という問題は、日本に比してドイツでは大きな問題にはならなかった。

URL：<https://x.gd/g6wCl>"<https://x.gd/g6wCl>

・「オーストリアのCOVID-19対策タイムライン」

概要：オーストリアでは、ワクチン未接種者に限定したロックダウンや、全市民に対するワクチン義務化を実施する(これは欧州初)など、ワクチン接種を積極的に推進していたが、これには「ワクチン差別」「ワクチンの強要」といった倫理的観点からの反発が強かった。

URL：<https://x.gd/av4Kt>"<https://x.gd/av4Kt>

・「スイスのCOVID-19対策タイムライン」

概要：スイスは直接民主制を採用しており、国民投票が比較的頻繁に行われる国として知られている。「Covid-19法」成立後、この法の是非を問う国民投票を求める複数の市民団体が署名を集め始める。どちらの場合も、憲法で規定された五万をはるかに超える票数が集まり、二度の国民投票が行われた。結果として、どちらの国民投票においても、Covid-19法は賛成多数で承認された。特に二回目の投票は、ワクチンパスポート提示を義務付ける法的根拠となっている「Covid-19法の改正」の是非を問うものだった。このように、コロナ禍における社会的意思決定を国民に委ねた希少な例であると言える。

URL：<https://x.gd/SSuiJ>"<https://x.gd/SSuiJ>

・「ルクセンブルクのコロナ対策タイムライン」

概要：ルクセンブルクは、南はフランス、西と北はベルギー、東はドイツに隣接しており、毎日20万人の越境労働者を迎えていると言われている。これらの越境労働者は国内雇用の46%を占める。したがって、コロナ・パンデミック下では、これらの国家との国境を閉鎖するか否かは重要な政治的問題であった。また、小国であることが功を奏したのか、かなり早い段階から国民へのマスク配布に加えて、国民を対象とする感染検査を実現した。

URL：<https://x.gd/nEVjC>"<https://x.gd/nEVjC>

・「リヒテンシュタインのCOVID-19対策タイムライン」

概要：リヒテンシュタインのコロナ対応は、明示的にスイスの対応を意識している。その

中でも特筆すべきものとしては、コロナ証明書に際してスイスの専用アプリが使用されたことが挙げられる。さらに、リヒテンシュタインのコロナ対策として顕著なのは、非常に頻繁に予防措置を更新してきたという点である。また、2021年3月には、国内の健康保険に加入している者に限るが、新型コロナウイルス検査費用を（症状の有無を問わず）政府が負担する発表したことも特徴的な措置である。

URL : <https://x.gd/5iRou>"<https://x.gd/5iRou>

<その他>

- ・「英国だより：The UK Covid-19 Inquiryとは」

概要：本記事は、英国で2023年6月から開かれている、新型コロナウイルス感染症への対応と影響を問うThe UK Covid-19 Inquiryという審議会について報告したものである。本記事では、この審議会の目的として、以下の三つを指摘した。第一に、パンデミック中の政府の意思決定過程と対応を明らかにすること、第二に、それらの決定や対応が社会へもたらした影響を広く検証すること、第三に、総合的な検証結果の記録と将来のパンデミック対応について提言を行うことである。

URL : <https://x.gd/pEmWx>"<https://x.gd/pEmWx>

■項目2：過去の感染症対策におけるELSIの抽出と検討

- ・「新型コロナウイルス(Covid-19)から得られた未来のための教訓に関するランセット委員会」（紹介・抄訳）

概要：本記事は、2020年7月に設立されたランセットCOVID委員会が公開した報告書の抄訳・紹介である。この報告書は、パンデミックを未然に防ぎ、持続可能な開発・人権・平和という目標を世界的に達成できるようにするため、強力な国連機関を軸とした多国間協力の新時代に貢献することを目的としている。本委員会報告書の第1節では、パンデミックを理解するための概念的枠組みを提供している。第2節では、パンデミックCOVID-19の注釈付き年表と、複数の課題に関するテーマ別の所見が示されている。第3節では、特にWHOを中心とした多国間協力による世界的な医療危機への対策と、強力な国家レベルの医療制度と低所得地域との国際的な資金・技術協力による将来の医療危機への備えへの取り組みについての政策提言が示されている。

URL: <https://x.gd/58XEr>

- ・「明治期のコレラにおける遺体の取り扱い」

概要：本稿では、明治10年から明治30年までのコレラ流行時における遺体の取り扱いを法令の面から概観した。明治時代は葬送の方法として、火葬とそれ以外（主に土葬）が併用されていたが、伝染病予防の諸法令においては、火葬が奨励された。特に人々に向けられた予防書である『虎列刺病予防諭解』では、火葬は改葬が可能だが土葬は出来ない、といったように、遺体からの感染を防ぐことができるということ以外の利点を挙げることで、火葬を勧めている様子をうかがい知ることができた。また、遺体を消毒剤で浸した布で包んで棺に入れ、棺も消毒剤で満たすといった処置が示されていたことも明らかになった。

URL: <https://x.gd/oEe1S>

■項目3：トランスサイエンス問題に対する人文社会科学系の研究モデルの開発

＜ELSI/RRIフォーラムの開催＞

2023年度は、ELSI/RRIフォーラムを3回開催した（標葉隆馬氏、三成寿作氏、田中幹人氏）。また、2022年度までに実施したフォーラムの記録を、読売新聞の増田弘治氏の助力も得ながら一般にわかりやすい形で一つの冊子の形で再編集し、web上で公開した。

標葉隆馬氏（2023年6月5日（月）10時～12時）：<https://x.gd/SbKT3><https://x.gd/SbKT3>

三成寿作氏（2023年11月27日（月）15:00～16:30）：近日中に公開

田中幹人氏（2024年2月15日（木）10:30-12:00）：近日中に公開

過去第1回～第5回のフォーラムをまとめた冊子：<https://x.gd/TncfW>

（4）当該年度の成果の総括・次年度に向けた課題

2023年度は、今まで紹介してきた資料を永続的に活用できるように、それらの資料を京大レポジトリ（KURENAI）に登録する作業を行った。

<https://repository.kulib.kyoto-u.ac.jp/dspace/handle/2433/284050>

また、2023年度は、前年度から継続して様々な資料の紹介、および多くの外部の研究者とのセッションを重ねた。項目1から項目3に関して、進捗はどれもおおむね順調である。2023年度は、2022年度に行ったパンデミックのELSIとして考慮すべき大まかな論点の析出を踏まえつつ、こうしたELSIを災害予防という視点からとらえなおし、その成果を、児玉聡著、『予防の倫理学』（ミネルヴァ書房、2023年）で公開することができた。

2024年度は、パンデミック対応における日本の独自性の分析さらには日本固有の価値の析出、ポストパンデミックへの移行に伴う問題の検討等を進めつつ、最終年度であるため、これまでの研究成果をまとめ多くの関係者に発信するために、国際シンポジウムの開催を計画している。

2 - 3. 会議等の活動

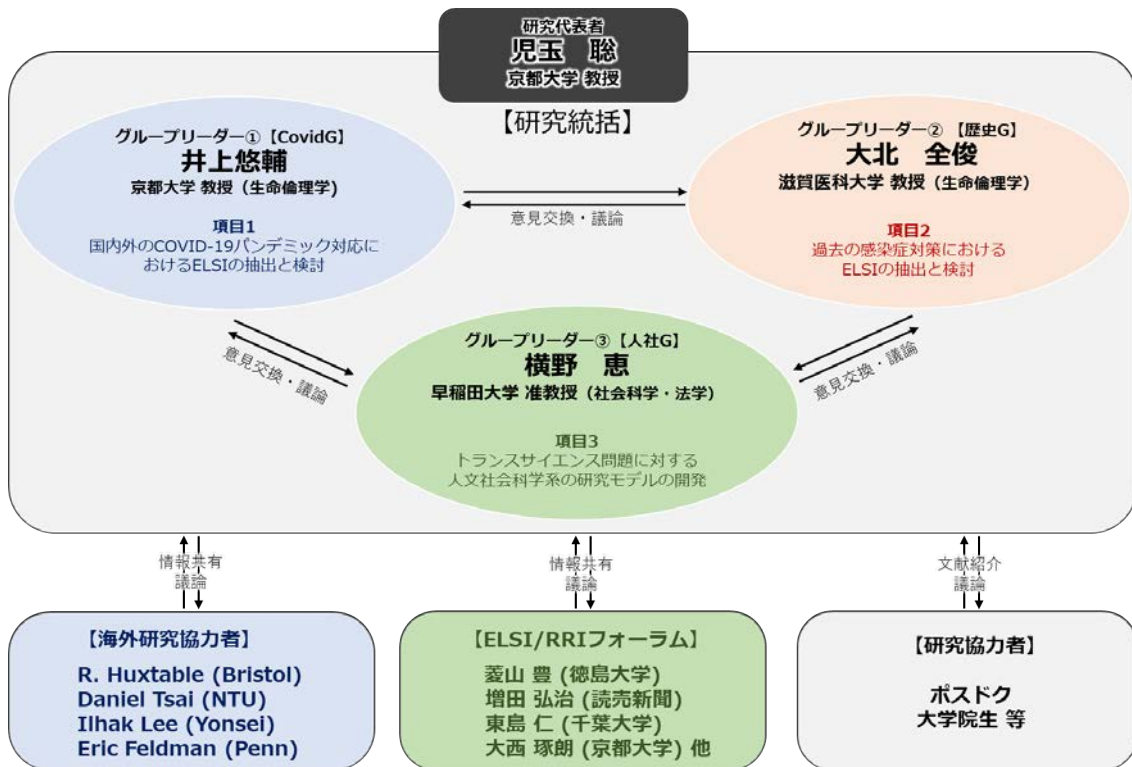
年月日	名称	場所	概要
2023年4月27日	月例研究者全体ミーティング	オンライン	4月度の研究の進捗と意見交換。
2023年5月31日	月例研究者全体ミーティング	オンライン	5月度の研究の進捗と意見交換。陰謀論等に関する議論。
2023年6月21日	月例研究者全体ミーティング	オンライン	6月度の研究の進捗と意見交換。
2023年7月21日	月例研究者全体ミーティング	オンライン	7月度の研究の進捗と意見交換。
2023年9月	月例研究者全体	オンライン	8-9月度の研究の進捗と意見交換。

28日	ミーティング		感染症危機管理統括庁の設置等に関する議論。
2023年11月1日	月例研究者全体ミーティング	オンライン	10月度の研究の進捗と意見交換。
2023年11月29日	月例研究者全体ミーティング	オンライン	11月度の研究の進捗と意見交換。アーカイブ資料の纏め方等に関する議論。
2023年12月20日	月例研究者全体ミーティング	オンライン	12月度の研究の進捗と意見交換。シンポジウム「生命倫理の現状と展望」での報告内容等に関する議論。
2024年1月24日	月例研究者全体ミーティング	オンライン	1月度の研究の進捗と意見交換。
2024年2月20日	月例研究者全体ミーティング	オンライン	2月度の研究の進捗と意見交換。ELSI関連の新聞報道等に関する議論。
2024年3月11日	月例研究者全体ミーティング	オンライン	3月度の研究の進捗と意見交換。来年度の計画等に関する議論。

3. 研究開発成果の活用・展開に向けた状況

上述した、「スイスのCOVID-19対策タイムライン」、「ルクセンブルクのコロナ対策タイムライン」、「リヒテンシュタインのCOVID-19対策タイムライン」は、本研究の一環で開発したパンデミックELSIタイムライン(COVID-19パンデミック発生時からのELSIに関連するニュースや記事を時系列にまとめたもの)の活用例として作成したものである。今後も、こうした取り組みは継続していく予定である。

4. 研究開発実施体制



5. 研究開発実施者

Covidグループ（リーダー氏名：井上悠輔）

氏名	フリガナ	所属機関	所属部署	役職 (身分)
児玉 聡	コダマ サトシ	京都大学	大学院文学研究科	教授
井上 悠輔	イノウエ ユウスケ	京都大学	医学部	教授
Michael Campbell	キャンベル マイケル	京都大学	大学院文学研究科	助教
洪 賢秀	ホン ヒヨンス	明治学院大学	社会学部	研究員
濱島 ゆり	ハマシマ ユリ	ブリストル大学	医学部公衆衛生学科	助教
三上 航志	ミカミ コウジ	京都大学大学院	文学研究科	研究員
伊沢 亘洋	イザワ コウヨウ	京都大学大学院	文学研究科	D3

石原 諒太	イシハラ リョウタ	京都大学大学院	文学研究科	D2
小木曾 良哲	コギソ ヨ シアキ	京都大学	文学部	B5
于 松平	ウ ショウ ヘイ	京都大学大学院	経済学研究科	D3
沼田 詩暖	ヌマタ シ ノン	京都大学	文学部	M2
杉村 文	スギムラ フミ	京都大学大学院	文学研究科	M1
内藤 淳之介	ナイトウ ジュンノス ケ	京都大学	文学部	B5
澤田 あおい	サワダ ア オイ	京都大学	工学部	B2
北爪 智佳子	キタズメ チカコ	京都大学	総合人間学部	B3
大社 裕典	オオコソ ユウスケ	京都大学	工学部	B2
安藤 萌音	アンドウ モネ	京都大学	農学部	B4
中島 丈	ナカジマ ジョウ	京都大学	文学部	B4
鍾 宜錚	ジョン イ ジェン	熊本大学	生命科学研 究部	助教
田中 美穂	タナカ ミ ホ	日本医師会 総合 政策研究機構		主任研究員
小門 穂	コカド ミ ノリ	大阪大学	大学院人文学 研究科	准教授
太田 勇希	オオタ ユ ウキ	欧州研究評議会 (ERC)助成PJ 『責任の諸根源』		研究責任者補 佐

歴史グループ（リーダー氏名：大北全俊）

氏名	フリガナ	所属機関	所属部署	役職 (身分)
大北 全俊	オオキタ タケトシ	滋賀医科大学		准教授
小門 穂	コカド ミ ノリ	大阪大学	大学院人文学 研究科	准教授

田中 美穂	タナカ ミ ホ	日本医師会 総合 政策研究機構		主任研究員
-------	------------	--------------------	--	-------

トランスサイエンス問題に対する人文社会科学系の研究開発グループ（リーダー氏名：横野恵）

氏名	フリガナ	所属機関	所属部署	役職 (身分)
横野 恵	ヨコノ メ グム	早稲田大学	社会科学部	准教授
鍾 宜錚	ジョン イ ジェン	熊本大学	生命科学研究部	助教
太田 勇希	オオタ ユ ウキ	欧州研究評議会 (ERC)	助成プロジェクト『責任の諸根源』	研究責任者 補佐
石川 英里	イシカワ エリ	早稲田大学	グローバルヘルス研究所	次席研究員 (講師)
日野 愛梨	ヒノ エリ ン	早稲田大学	社会科学部	学部学生

6. 研究開発成果の発表・発信状況、アウトリーチ活動など

6-1. シンポジウム等

年月日	名称	主催者	場所	参加人数	概要
2023年6月8日	SPT2023 23rd Biennial Conference in Tokyo		国立オリンピック記念青少年総合センター		ソーシャルメディアにおける医療情報の信頼性に関する発表と質疑応答。
2023年12月17日	シンポジウム「生命倫理の現状と展望」		京都大学大学院文学研究科		生命倫理の次の世代の研究者や研究領域をどのように維持し作り上げていくのかについて議論。
2024年3月2日	ELSI哲学フォーラム		京都大学大学院文学研究科		プラットフォームの倫理や経済と人命のバランスに関する発表。

6-2. 社会に向けた情報発信状況、アウトリーチ活動など

(1) 書籍、フリーペーパー、DVD

- ・ 児玉聡, 『予防の倫理学』, ミネルヴァ書房、2023
- ・ 小門穂, 「生殖補助技術」, ジェンダー事典編集委員会編, 『ジェンダー事典』内, 丸善出版, 2024

(2) ウェブメディアの開設・運営

- ・ プロジェクト Web サイト
 サイト名: 「パンデミックに取り組む応用哲学・倫理学: 哲学と ELSI 研究のためのアーカイブ」 (2020年5月開設)
 <URL>: <https://www.pandemic-philosophy.com/> <https://www.pandemic-philosophy.com/>
- ・ プロジェクト Twitter アカウント
 アカウント名: @pandemicphilos1 (2020年5月開設)
 <URL>: <https://twitter.com/pandemicphilos1>
- ・ プロジェクトニュース・情報発信用 Twitter アカウント
 アカウント名: @pandemethics (2021年12月開設)
 <URL>: <https://twitter.com/pandemethics> <https://twitter.com/pandemethics>

- (3) 学会（6-4.参照）以外のシンポジウム等への招聘講演実施等
・（シンポジウム等の名称、演題、年月日、場所を記載）

6-3. 論文発表

(1) 査読付き（3件）

●国内誌（2件）

- 洪賢秀・小門穂・柘植あづみ「提供卵子による生殖補助医療の経験における迷いと悩み—Web アンケート調査結果より—」, 『生命倫理』日本生命倫理学会, 2023, 34号, 79-92頁
- 鍾宜錚「パンデミック時の意思決定—台湾における DNR 指示の使用と治療中止の課題」『大谷大学真宗総合研究所研究紀要』, 第40号, 2023年 45-59頁.<https://onl.sc/iKLzuRG>

●国際誌（1件）

- Satoshi Kodama, “Ethical Challenges of the COVID-19 Pandemic: A Japanese Perspective,” *Journal of Medical Internet Research*, Vol 25, 2023, <https://www.jmir.org/2023/1/e44820><https://www.jmir.org/2023/1/e44820>, e44820.

(2) 査読なし（4件）

- Haluna KAWASHIMA, Minori KOKADO, “La protection juridique et sociale du fœtus au Japon”, François VIALLA, Pascal VIELFAURE et al. , *Naître ou ne pas naître De l'Antiquité au XXIe siècle*, LEH edition, 2023
- 小門穂, 「生殖技術とルール—当事者をどう守るか」, 松田毅・藤木篤・新川拓哉編著, 『応用哲学』内, 昭和堂, 2023
- 小門穂, 「フランスにおける臨床研究の法的ルールの現状と課題」, 甲斐克則編, 『医事法講座第13巻 臨床研究と医事法』内, 信山社, 2023
- 田中美穂, 「4. 新型コロナウイルス感染症の世界的流行時のアドバンス・ケア・プランニングの実践とその課題」, 木澤義之、森雅紀、ホスピス緩和ケア白書編集委員会編, 『ホスピス緩和ケア白書2024』内, 青海社, 2024

6-4. 口頭発表（国際学会発表及び主要な国内学会発表）

(1) 招待講演（国内会議___3件、国際会議___2件）

- Miho Tanaka and Satoshi Kodama, (4 Nov. 2023), 'Review of public policies and incidents of end-of-life care in Japan over the past decade,' Yonsei-Kyoto Workshop, at Seoul (South Korea).
- 大北全俊（2024年3月17日）「新型コロナウイルス流行にみる公衆衛生倫理」, 文化看護学会第16回学術集会

- ・ 大北全俊（2023年4月4日）「医療と公衆衛生の倫理：COVID-19パンデミックの経験から」、文化看護学会第16回年次大会
- ・ 大北全俊（2023年8月27日）「第2回「研究倫理を語り合うフォーラム」看護学における教育実践研究の倫理：医療倫理の立場から」、日本看護学教育学会第33回学術集会
- ・ Satoshi Kodama, (14 Oct. 2023), 'Conceptual and ethical issues in pandemic response', The Uehiro-Oxford-Melbourne-Japan Conference, at Tokyo (Japan),

(2) 口頭発表（国内会議____4件、国際会議____2件）

- ・ 洪 賢秀（2023年6月4日）「ワクチン法制の比較：新型コロナウイルス感染症パンデミックの前と後～韓国」、比較法学会第86回（2023年度）総会シンポジウム
- ・ 伊沢亘洋（2024年3月2日）「経済と人命のバランスをとるために考えること」、ELSI哲学フォーラム
- ・ 小門穂（2023年12月10日）「学技術社会論学会会員の研究倫理審査に関する経験」、（実行委員会記念シンポジウム「研究倫理審査をアップデートする：ELSI/RRIを組み込んだ技術開発・社会実装の作法」）、科学技術社会論学会第22回年次研究大会
- ・ Koyo Izawa, Koji Mikami, Satoshi Kodama (8 Jun. 2023), "What makes health information more reliable in social media? :From an analysis of the COVID-19 infodemic in Japan," SPT国際学会.
- ・ Miho TANAKA, Yicheng CHUNG, Hyunsoo HUNG, Satoshi KODAMA, (Oct.2023.), 'Psychocultural and Social Characteristics of End-of-Life Care in South Korea, Taiwan, and Japan', Asia Pacific Hospice Care 2023, Incheon South Korea.
- ・ 三上航志（2024年3月2日）「情報フィデューシャリーのプラットフォームへの適用の検討」、ELSI哲学フォーラム

(3) ポスター発表（国内会議____件、国際会議____件）

- ・ 該当なし

6-5. 新聞/TV報道・投稿、受賞等

(1) 新聞報道・投稿（ 2 件）

- ・ 児玉聡、「「プロメテウスの思考」を 倫理学者・児玉聡氏が考えるコロナの教訓」、『朝日新聞』2023年6月7日朝刊
- ・ 児玉聡、「京都大学の教授が「予防の葛藤」 解きほぐす 犯罪・災害・病気・事故…分野超え倫理的考察、書籍刊行」、『京都新聞』2023年12月4日朝刊

(2) 受賞（ 0 件）

- ・ 該当なし

(3) その他（ 0 件）

- ・ 該当なし

6-6. 知財出願（出願件数のみ公開）

（1）国内出願（ 0 件）

・該当なし

（2）海外出願（ 0 件）

・該当なし